

キリストの十字架 秘められた計画としての神の福音

逆説という言葉がある。一見したところ道理に合わず、真理に反するようであるが、しかし実際のところ真理そのもの、或いは真理をいいあてているというようなもの、これが逆説である。

栄光の神が、この罪の世のただ中に自ら人となって、しかも卑しい僕(しもべ)の形を取ってお出でになられ、救い主として人間の悲しみ、人間の罪を背負われ、身代わりとなって十字架にかかって死んで下さったというこの福音、そのようにして人間の罪の贖いと赦しの道が開かれた、というこの十字架の福音は、人間の知恵にとっては躓きであり愚かにしか見えないが、これこそまさに前代未聞の、いかなる哲学、宗教も考えつくことのできなかつた逆説的な出来事であった。

使徒パウロは第1コリント第1章において、このことを、即ち、人間の知恵との対比においてこのイエス・キリストの十字架の出来事にあらわされた神の逆説的知恵について語り、これを第2章において「世の始まらぬ先から予め定められた」「隠され奥義(ムステリオン)としての神の知恵」と呼んでいる(2:7)。神の奥義とは、長い間神の内に隠されていたが、しかし時の満ちるに及んで、イエス・キリストにおいて決定的な形で、歴史の中に啓示された神の救いの計画に他ならない(ローマ16:25～27、エペソ1:10、マルコ1:15)。

しかし、この世の知恵はこの「神の奥義=神の秘められた計画」を理解することが出来なかつた。宗教的知恵に優れ神の民を自認したユダヤ人はこれにつまづき、哲学的知恵を誇ったギリシャ人はそれを愚かとし受け入れることを拒んだ(1:23)。この個所でもパウロは言う(2:14)。

自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。

自然の人とは福音を愚かとし拒絶する「生まれながらの人」(2:14)のことである。十字架の福音に対するそのような反応は今の時代も変わりはない。今日においてもキリストの十字架の福音は不可解とされ、愚かとされ、物笑いの対象にされているのである。

なぜか？ パウロはその理由を10節以下で語る。人の救いは徹底的に神の恩寵の賜物であって、神の側からの啓示なしに、すなわち人の心の内に働きかける神の御霊の働きなしに「生まれながらの人」、すなわちアダムから受け継いだ罪の人間性を背負ったままの人間はだれ一人、「十字架につけられたキリスト」を「栄光の主」(2:8)「私の救い主」として受け入れることができないのである、と。

神の御霊が心の内に働いて、十字架の真理に目を開いてくださる時、はじめて人は自分の罪を悟り「イエスこそ救い主であり、わたしの主である」と告白することができるのである。別の個所で「神の霊によって語る者はだれでも“イエスはのろわれよ”とは言わないし、また、聖霊によらなければだれも“イエスは主である”と言うことはできない」とパウロが語っている通りである(12:3)。